

第四章 聖ヨハネ祭と「ハーメルンの笛吹き男伝説」

溝井 裕一

一 「ハーメルンの笛吹き男伝説」とは

不気味な事件 「ハーメルンの笛吹き男伝説」（以下「笛吹き男伝説」と表記）は、ドイツでもっとも有名な伝説のひとつである。ここではまず、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』（一八一六年）にある話を見ることがしよう。

ときは一二八四年、ハーメルンの町がネズミの害に悩んでいると、謎の放浪者があらわれて、害獣を退治しようともちかけた。市民はこれを喜び、報酬を支払うと約束した。すると男はふしぎな笛を鳴らして町中のネズミを集め、ヴェーザー川までこれを導いて溺死させた。ところが悩みから解放されてしまうと、市民は金の支払いを拒否した。男は激怒して一度その場を離れたが、六月二六日のヨハネとパウロの日にもた町へ戻ってきた。そしてかれがふたたび笛を吹き鳴らすと、今度は町中の子どもたちが走り出てきた。男は、子どもを集めるとそのまま近郊の山の洞穴へ向い、そこで姿を消してしまった。このとき失踪した子どもたちは一三〇人であったという。この事件ののち、かれらがとおっていった通りは「舞樂禁止通り」とよばれ、そこではダンスや音楽の演奏が禁止となった。



図4-1 毎年ハーメルンでおこなわれる野外劇（筆者撮影）

またハーメルンには、公示をする際、子どもが失
踪してから経た年月を示す習慣があったという。

一般にこの伝説は、じっさいの事件が核となつ
て形成されたといわれている。子どもたちが消え
たほんとうの理由については、これまでさまざま
な説が唱えられてきた（戦死説、東方植民説、遭
難説など）。もちろん筆者も、「笛吹き男伝説」の
背景に、何らかの事件があったことを否定するも
のではない。しかし今回は、聖ヨハネ祭（夏至祭、
六月二二―二四日）にまつわる不気味な信仰が、
「笛吹き男伝説」の形成に重大な影響を及ぼした
可能性について述べることにしたい。

これまでの研究でも、ハーメルンで「事件」が
起こったとされる六月二六日が、聖ヨハネ祭の直
後にあたることは指摘されている。ところが、こ
の時期になると異界が口を開け、デーモンたちが
姿をあらわすと信じられていた事実は、意外にも
あまり重視されてこなかった。

一 「ハーメルンの笛吹き男伝説」とは



図 4-2、4-3 ハーメルンの町並み（筆者撮影）



図4-4 ネズミが溺れさせられたというヴェーザー川（筆者撮影）

かつてこのような信仰があったことは、中世の資料だけでなく、ドイツ語圏とその周辺国で集められた多くの伝説資料によっても確認される。そして「笛吹き男伝説」を夏至にまつわる諸伝説と比較すると、この言い伝えの知られざる側面が見えてくる。すなわち、「ハーメルンの笛吹き男」（以下「笛吹き男」と表記）は、たんに当時少なくなかった放浪楽師の一員であったのみならず、夏至にあらわれる異界の住人の（そしてまた来訪神の）性質を備えていたことがあきらかとなるのである。

この章ではまず、「笛吹き男伝説」の内容を、中世までさかのぼって確かめておきたい。それから聖ヨハネ祭の風習を概観し、多数の「夏至伝説」（夏至にまつわる伝説）の内容を検討する。そしてこれらを踏まえたいうで、夏至のころにあらわれたという「笛吹き男」について、中世の文化的状況も勘案しながら、筆者の意見を述べていきたい。

二 中世—近世に語られた「笛吹き男伝説」

リユーネブルクの手写本　ここでは最初に、「笛吹き男伝説」の古い資料が、いかなる内容をもっていたかを確認したい。今日知られている資料のなかで、もつとも重要と考えられるのは「リユーネブルク手写本」と呼ばれるものである。これは、一九三六年にリユーネブルクの文書館においてハーメルンの郷土史家ハインリヒ・シュパヌーとトロッパウの文書係ヴォルフガング・ヴァンが発見したもので、『黄金の鎖』カテナウレア（一三七〇年）を筆写した本の末尾に記されていた。文書館の係員ライネケは、その筆跡からこれを一四三〇／五〇年のものとしている。そこにはつぎのように書かれていた。

報告すべきは、ミンデン司教区の町ハーメルンにて、主の年から数えて一二八四年の、まさにヨハネとパウロの日に起こった、まったく尋常ならざる奇跡である。ひとりの美しくてりっぱな服を着た三〇代の若者が、橋を渡つてヴェーザー門から（町へ）入ってきたのだが、その容姿と服装に、見た者すべてが感嘆したものだ。かれは、奇妙なかたちをした銀の笛を町中で吹き鳴らしはじめた。すると笛を聞いた子どもたち一三〇人ほどが、かれにつづいて東門をくぐり、いわゆるカルワリアすなわち処刑場へ出ていったのである。かれらはそこで消えてしまった。しかもそのうちのひとりとして、どこにいったものやらまったく見当がつかなかった。子どもたちの母親は、町から町へとかけずりまわったが、すべては徒勞であった。それゆえ「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ」「マタイによる福音書」二・一八、新共同訳（*）。そして主の年から、ある

いは記念祭から一年、二年、三年と数えるごとく、ハーメルンの人びとは子どもたちの出立と失踪から、一年、二年、三年と年を数えるのである。これをわたしは古い本で見た……なお院長ヨーハン・フォン・リューデ氏の母が、子どもたちが出ていくのを目撃した。

(*)…『新約聖書』にある、ヘロデ王が幼子イエスを亡きものにするため、ベツレヘム一帯の幼児を片端から殺させた話にちなむ。

この文章からわかるように、初期の伝説ではネズミ捕りの話は語られていない。一七八四年の六月二六日に、謎の楽師によって一三〇人の子どもが誘拐され、カルワリアなる場所で姿を消したとあるだけである。

筆者が強調しておきたいのは、子どもをさらったという人物の描写である。「リューネブルク手写本」によれば、かれは見た目が美しいだけでなく、立派な服を着ていて人びとを感嘆させたという。もちろん中世にそのような人物がいたとしてもふしぎではない。なぜならこの時代、宮廷では放浪芸人たちに豪華な衣服が贈られたからである。しかし「見た者すべてが感嘆した」というくだりから判断されるように、ここでは「りっぱな服」というのは男が尋常ならざる人物であったことを示す、ある種の記号のように見える。さらにその特異な性格は、「奇妙なかたちをした銀の笛」によって強められる。その魔法の音色に誘われて、子どもたちは失踪してしまうのである。

また手写本の書き手は、伝承の内容を記述するにとどまらず、ハーメルンの人びとには事件発生ののち一年、二年と年を数える習慣があったことを挙げ、それを「古い本」で見たと述べている。これはおそらく、阿部謹也が指摘するようにハーメルンの法書(ドナ)のことであろう。そこでは、当地の事件について具体的なことはいつさい述べられていない。しかし一三五一年におこなわれた不動産売買に関する記録の末尾に、こう書かれている。

われわれの公証人ヨーハン・トゥレマンの手で与えられた。一三五一年アンブロシウスの日「四月四日」のと。子ども出立ののち……二八三「一二八三年？」。

最後の「子ども出立ののち……二八三」の部分は、あとで別の人物によって書き加えられたようだが、「笛吹き男伝説」の研究者ハンス・ドバーテインは、これもやはり一四世紀に記入されたものだとしている。

それからもうひとつ、「リユーネブルク手写本」で注目されるのは、ヨーハン・フォン・リユーデの母親の言及であろう。リユーデ自身は一三二八年にはじめて記録に姿をあらわし、一三七八年に没している。手写本が書かれたのがほんとうに一四三〇／五〇年であるなら、その筆者がリユーデのことを個人的に知っていてもふしぎではない。そうなると、かれの母親が一二八四年の子どもの出発を見たというくだりは真実味が出てくる。これが、ハーメルンでじっさいに何かあったのではないかといわれるゆえんである。もともとこの「リユーネブルク手写本」が書かれたのは、「事件」の期日から約一五〇年もあとのことであり、伝説が形成されるにはじゅうぶんな期間をへている。

「事件」の真相を追って 阿部は、「リユーネブルク手写本」よりさらに古い一次資料として、ハーメルンのマルクト教会にあったとされるステンドグラスと、ミュンスター（律院）にあったミサ書『パッシオナレ』を挙げている。これらの資料は、いずれも一四世紀にさかのぼるとされている。だがその成立時期をめぐっては、研究者たちの意見は対立したままである。その理由は、原典が紛失してしまい、筆写されたものしか残存していないことにある。



図4-5 マルクト教会 (筆者撮影)

ステンドグラスの内容は、サムエル・エーリヒが一六五四年に筆写したものをとおして知ることができる。かれによれば、そこには派手な衣装の男(笛吹き男)が子どもたちとともに描かれ、図4-7に示した碑文があしらわれていた。見てのとおり、その文章はどこどころ読めなくなっているが、それでも「ヨハネとパウロの日」(AM DAGE JOHANNES UND PAULI)、「カルワリア」(K-VARIE)、「コッペン」(KOPPEN)といった言葉は見とれる。カルワリアとは、一三三〇年以降、処刑場をあらわすのにもちいられた言葉である。コッペンはハーメルン近郊にあったとされる山のことだが、いまではそれが具体的にどの山のことを指していたのかわかっていない。「コッペン」はもともと、コッペルすなわち丘をあらわす語でしかなかった。

「笛吹き男伝説」の資料集を作成したドバーテインは、マルクト教会のステンドグラスがとりつ

二 中世—近世に語られた「笛吹き男伝説」

けられたのは一三〇〇年ごろの教会拡張工事のときだとしている。しかしその存在が記録に登場するのは、一五七一年になってからのことである。そのうえ、エーリヒが筆写したステンドグラスの内容は、ハーメルン市長フリードリヒ・ポツペンダイークが一五七二年に修正したあとのものである。その「修正」がどれほどの規模のものだったかは不明のままである。したがって、エーリヒの筆写したステンドグラスの内容が一四世紀初頭にさかのぼるといえるのは、仮説にすぎない。

ハーメルンのミュンスターに保管されていた、ミサ書『パツシオナーレ』の脚韻詩と散文もまた、成立年代が議

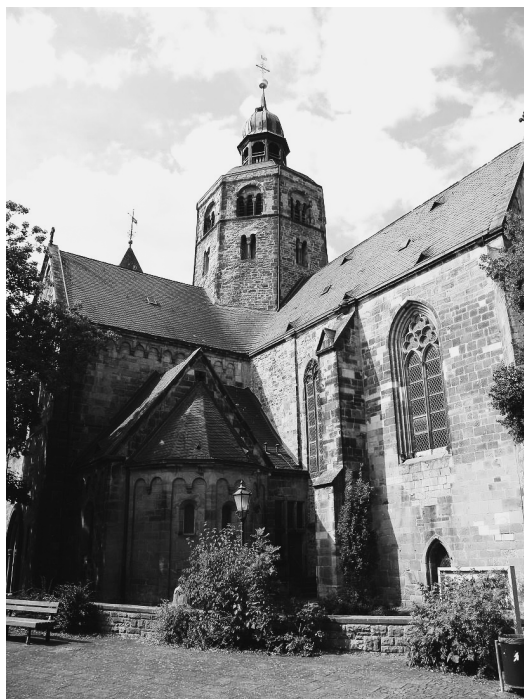


図4-6 ミュンスター（筆者撮影）

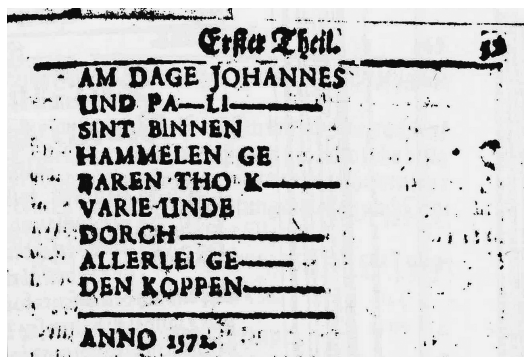


図4-7 ステンドグラスの碑文
(Erich, Samuel: *Exodus Hamelensis*. 1661年の版より)

論されている資料である。一四一―一五世紀に成立したと推定されているのだが、これも原本が失われており、一七一―一八世紀に筆写されたものしか見ることができない。

『パッシオナーレ』では、「笛吹き男」は具体的に言及されていない。まず脚韻詩の文章はつぎのようなものである。

一二八四年、これが男と女の消えた年、ヨハネとパウロの日に、一三〇人の子供たちが不運にも奪い去られた年である。なんでもカルワリアが、かれらをみな生きたまま呑みこんでしまったという。キリスト様、罪人たちに災難の降りかからぬよう守りたまえ。

つぎに、散文のかたちではこう書かれていた。

一二八四年のヨハネとパウロの日、カルワリアに入っていたハーメルンの一三〇人の子どもたちが失踪した。

ここでふたたび確認されるのは、子ども失踪の日付と現場である。またカルワリアが子どもを「生きたまま呑みこんでしまった」という記述が注目される。この表現のもとになっているのは、モーセにはむかつたユダヤ人が地面に呑みこまれたという、『旧約聖書』の記述であろう（「民数記」一六・三二―三四）。しかしこの一文は、ハーメルンの伝説と夏至にまつわる信仰との接点を読みとくうえでも重要となる。

ほかの資料は、一六世紀以降のものである。最初に挙げられるのは、中央広場に面して建っていた家の碑文で、

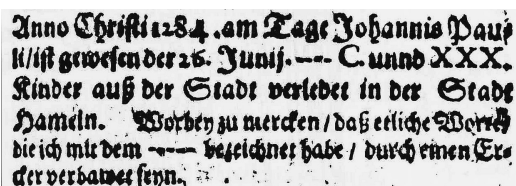


図4-8 中央広場に面して建っていた家の碑文
(Erich, Samuel: *Exodus Hamelensis*.)

一五二五年のものとされる。ただし一九〇〇年にとり壊されたため、これもエーリヒが筆写したかたちでしか残っていない。そこからは、「一二八四年ヨハネとパウロの日、六月二十六日」という事件の日付や、一三〇人の子どもが誘拐されたというくだりが読みとれる(図4-8)。

なおこの家にあつた碑文は、図4-9に示した「^{ラテンフエンゲイハウス}ネズミ捕り男の家」(一六〇二/〇三年)にあしらわれているものとはほぼ同様と見られている。そこには今日でも、「一二八四年のヨハネとパウロの日、六月二十六日に、色とりどりの服を着たひとりの笛吹き男によつて、ハーメルン出自の一三〇人の子どもが連れ出され、コッペン付近のカルワリアで失踪した」とあるのが読める。ここでは、「笛吹き男」は派手な服を着た者として表現されている。

つぎに注目されるのは、ハンス・ツァイトロースの年代記(一五五七年)である。かれはバンベルク市民であつたが、一五五三年に辺境伯フォン・ブランデンブルクⅡクルムバッハによつて人質としてニーダーザクセン地方まで連れてこられ、ハーメルンにも一時滞在している。このとき、かれは地元に住民から伝説を聞き、それを書きとめたようである。

この町から銃の射程ぐらいに離れたところに、カルワリアという山がある。市民のいうところでは、一二八三年に楽師の姿をした大男があらわれた。かれは色とりどりの上着をまとい、笛をもっていたが、これを町中で吹き鳴らした。すると町の子どもたちが走り出てきて、かの山までいくとそこで沈んでしまった。ただ

二人の子どもが裸のまま帰ってきたが、ひとりには盲目で、もうひとりは口がきけなかった。子どもを探そうと母親たちが走り出てきたとき、例の男はこういった。「もつと大勢の子どもを連れていくために、三〇〇年後に戻ってくるぞ」と。「失踪した」子どもは一三〇人だったということだが、その後かの地の人びとは、一五八三年に男がふたたびやってくると恐れている。



図 4-9、4-10 「ネズミ捕り男の家」とその碑文
(筆者撮影)

ツァイトロースは、(おそらく法書の記録を読んで)子ども失踪が一二八三年に起こったとしていた。事件の具体的な日付について記していない。しかしかれは、当時ハーメルンの人びとが謎の楽師を「大男」として表現していたこと、男が失踪した子どもを探しまわる母親たちにたいし「三百年後に戻ってくる」と宣告したことなどを記している。

こうした描写のなかにあらわれるのは、超自然的な性格を増幅させた「笛吹き男」のイメージである。大男であることは、「笛吹き男」が特異な外見をもっていることを示す。さらにかれは、三百年のときを経てふたたび出現すると脅したという。こうなると「笛吹き男」は、もはや人間ではなく、悪魔のような存在といっても過言ではない。もうひとつ注目されるのは、子どもが山のなかに「沈んでしまった」というくだりである。これは『パッシオナーレ』にあるのとおなじ表現である。

つぎなる資料は、ヨブス・フィンツェリウスの『奇跡の印』(一五五六年)である。これは、説教に使うことのできる奇跡譚をまとめたもので、そのなかにハーメルンの事件が紹介されている。フィンツェリウスによれば、一五三三年から数えて約一八〇年前(一三五〇年ごろ)のマリア・マグダレナの日(七月二二日)に、悪魔が人間の姿であらわれ、笛の音で子どもをさらっていったという。ここでは、ほかの資料とは異なる期日が挙げられ、「笛吹き男」と悪魔が同一視されている。

フィンツェリウスの著書で聞きなれぬ日付が出てきた理由は定かでない。かれ自身は、ハーメルンに滞在したことはない。したがってかれは日付を聞きちがえたか、伝説の別のバージョンを聞いたと推測される。フィンツェリウスのほかにもこの日付を挙げている著者がいるが、それはすべてかれの本を参照したためである。ハーメルンでは、事件の日付は一貫して一二八三／八四年の六月二六日と伝えられていたと見てまちがいない。

ネズミ捕り男のモチーフ さらにこのころから、子どもの誘拐伝説とネズミ捕り男の話が融合する。その最初の例は、「ツインメルン年代記」（一五六四―一六六六）に見いだせる。

内容を要約すると、かつてハーメルンでは、ネズミの害に悩まされている時期があった。すると、神の配剤によってか「ひとりの見知らぬ、素性のわからない男ないし放浪者」があらわれ、ネズミ退治を申し出た。市民はこれを喜び、数百グルデンの報酬を支払うと約束した。そこで男は笛の音で町中のネズミを呼び集めると、これを近くの山に閉じこめてしまった。ところが、状況が一変するや市民は態度を変え、たいした苦勞もせずにおこなった仕事などに、金を払ってたまるかという。すると男はふたたび笛を吹き鳴らした。そのとたん、子どもが走り出てきて、男と一緒に近郊の山までついていった。そして山は口を開き、一行がなかに入ったあとで閉じてしまったという。

ハーメルンの誘拐伝説に、なぜネズミ捕り男の話が追加されたのか。それは、初期の誘拐譚を聞けば誰でも思いつく「なぜ笛吹き男は子どもを誘拐したのか？」という問いに答えるためであったのかもしれない。しかも後述するように、裏切られたネズミ捕り男の復讐譚はヨーロッパ各地に存在していたため、誘拐伝説からネズミ捕り男伝説に発展するのは容易であった。ただ、ネズミ捕り男の話はたんなる付け加えとして軽んずるべきではない。「笛吹き男」のなかに来訪的な性格を見いだすうえで、この伝説の発展は重要な意味を含んでいるからである。

ちなみに、「ツインメルン年代記」は一九世紀になってはじめて印刷されたので、後世に与えた影響は少なかったと見られる。むしろ影響の観点から重要なのは、一六世紀の魔女狩りに果敢に抵抗したヨーハン・ヴァイアーの『悪魔の眩惑』であろう。かれはこの著書のなかで、「魔女」とは悪魔の眩惑にたぶらかされた哀れな人びとにすぎないので、かの女らを処刑するのは誤っていると説いた。ヴァイアーはそのさい、過去に知られている悪魔の暴虐

もリストアップしたが、ハーメルンの伝説もそのなかに含まれている。

ヴァイアーは、一五六六／六八年の版においてすでに「笛吹き男伝説」に言及している。しかしかれは伝説に個人的な興味をいだいたらしく、一五七七年、一五八〇年と版を重ねていくなかで情報を追加している。ここでは、少し長くなるが一五八六年の版を引用したい。

それに似つかわしいのは、その派手で色とりどりの服装ゆえにプンティングと呼ばれていた笛吹き男の^{ヒストリア}実話であろう。これは、ブラウンシュヴァイクのハーメルンで起こったことである。この男は、町から大きなネズミもしくはドブネズミを追いはらったとき、約束された金が支払われなかったため、後述するような恐ろしい行為によって人びとに忘恩の報いを与えたのである。すなわちかれは、一二八四年六月二十六日にふたたび町にやってくる、一本の通り（この事件ゆえに名前がついている）をとおって笛を吹き、少年少女一三〇人を集めるなり、町を出て街道に面するコッペという処刑場へと真夜中ごろに導いた。すると地面が一行を呑みこんでしまい、その後かれらのうちのひとりとして、目撃されることがなかった。このことはハーメルンの市参事会議事録や年代記に熱心に記録されているだけでなく、教会の書にも書かれている。ステンドグラスにも描かれているが、これはわたしが自分の目で見たので証言できる。しかも市参事会は、古くからこの事件を証明するために、手紙や遺言補足書に、キリストの年とならんで子どもの出立の年を書き留めるのを常としている。おまけに今日、子どもがとおって町を出ていった通りでは、この事件を永遠に記憶にとどめるために誰も踊ったり太鼓をたたいたりしてはならないとされている。結婚式の列がとおるときさえ、人びとは通りを抜けるまでは伴奏しない。この通らないし小路には名前があつて、舞樂禁止通りという。この事件は朝の七時に起こつ



図 4-11、4-12 舞楽禁止通り (筆者撮影)

たともいわれており、成長して結婚適齢期にさしかかった市長の娘も一行のなかにいたという。ただひとりの少年だけは無事で、ついでいこうとしたが裸だったので、服を着るためにとつて返し、それから他の子どものもとへと急いだ。しかしこのあいだに、かれらはみな一緒に丘の小さな洞窟のなか（わたしはこれを見せてもらった）に入っていく、二度と目撃されることがなかったのである。あきらかなのは、笛吹き男は嫌悪すべき悪魔以外の何者でもなかったということである。悪魔は常に、殺人と人間の血に飢え、渴きを覚えるのだ。

このように、じかにハーメルンを訪問したことのあるヴァイアーは、当地で見たという教会の本（おそらくミサ書『パッシオナーレ』、ステンドグラス、ハーメルン市民の年月の数えかた、舞楽禁止通り（図4-11・12）など）についてひととおり言及している。さらにかれば、一二八四年六月二十六日という、他の資料と共通する日付を載せた。

さらに注目されるのは、子どもたちが山で失踪した時間帯として真夜中が挙げられている点である。というのは民間信仰において、夏至の時期に異界の住人があらわれたり、山が口を開けたりするのは真昼か真夜中ごろとされていたからである。

そしてヴァイアーは、フィンツェリウスと同様、「笛吹き男」をためらうことなく悪魔と解釈している。これは、中世—近世において楽師がとりわけ悪魔に近い立場にいるとされていたことと無関係ではない（後述）。

絵画が語る伝説 最後に、有名な「笛吹き男伝説」の絵画資料を紹介しておきたい（図4-13）。これは一五九二年のものだが、「笛吹き男」がネズミを退治する様子、子どもを山のふもとの処刑場付近まで連れていく様子が描かれている。さらに山には不気味な穴が口を開けていて、子どもの一団を呑みこもうとしている。これが、一六世紀末の人間が視覚的に描いた、ハーメルンの「事件」である。

ここまでで確認できたように、伝説ではハーメルンで子どもも失踪が起こったのは、一部の例外をのぞいて一二八三／八四年の六月二十六日（ヨハネとパウロの日）とされている。子どもを誘拐したという「笛吹き男」は、美しくりっぱに着飾っていた、大男であった、派手で色とりどりの服を着ていたなどと報告された。その派手な外観は、一五九二年の絵画でも表現されている。



図4-13 アウグスティン・フォン・メルシュベルクの旅行記の挿絵
(Dobbertin, Hans: Quellensammlung zur Hamelner Rattenfängersage.)

先にも述べたように、放浪芸人はしばしば贈呈されたりつばな服を着た。しかも赤、緑、茶などの色をあしらった服を身につけて、ひとの目を引こうとしたといわれる。だが伝説における「笛吹き男」の外観は、たとえそれがまちまちであるにせよ、その特異な性格を強調するための記号であるとも解釈される。さらにその特性は、魔法の笛というアイテム、三百年後に戻ってくるなどという発言によって強められる。中世―近世の人びとは、問題の楽師を、実在の人間として見るだけではなく、異界に片足を突っこんだ存在ともみなしていたのではないか。

失踪原因をめぐる論争 いずれにせよ、これまで多くの研究者は、伝説の核には「歴史的事件」があるとして、さまざまな推測をしてきた。たとえば、じっさいにはハーメルンの

若者たちは一二五九／六〇年の「ゼーデミュンデの戦い」で戦死したとか（戦死説）、東方へ集団移住したとか（東方植民説）、ペストで死んだ（ペスト説）などといわれてきた。これらの諸説を細かく検証することは、この本の目的ではない。ただ本章のテーマとの関係で重要と思われる研究にのみ、少し言及しておきたい。

ヴェリー・クローグマンとヴァルトラウト・ヴェラーは、それぞれ聖ヨハネ祭の風習とハーメルンの「事件」を結びつけようとした。たとえばクローグマンは、この町の子どもが失踪した原因は、しばしば聖ヨハネ祭に発生した舞踏病であるとした（舞踏病説）。舞踏病とは、一六世紀まで観察された現象で、これにとりつかれた人びとは、疲労困憊して倒れるまで荒々しく踊りつづけたといわれる。この現象でとくに知られているのは、エアフルトの事件である。一二三七年、エリザベトの列聖がきっかけとなり、興奮した百人ほどの子どもたちが踊り狂いながら、親の知らぬうちに市門をぬけて遠く離れたアルンシュタットに達し、そこで疲労のあまり倒れてしまった。アルンシュタットの通報を受けるまで、親たちは子どもが行方がわからなかったという。これはハーメルンの伝説を強く想起させる話である。

こうした舞踏病は、聖ファイトの踊り、もしくは聖ヨハネの踊りといった。聖ヨハネ祭を機に、しばしば発生したからである。たとえば一三七四年には、この祭りをきっかけとして舞踏病が発生している。となればハーメルンでも、一二八四年六月二六日に、そのような事件が発生したとしてもふしぎではない。それに、子どもたちを舞踏病にかりたてる人物として、楽師ほどふさわしい人物はほかにいない。

ヴェラーの場合は、聖ヨハネ祭におこなわれた火祭りに着目している。これは、後述するように高台や開けた場所を火を焚く風習である。ヴェラーは、ハーメルンの子どもたちは——場合によっては楽師とともに——火祭りをしに「イト河畔のコッペンブリュッゲの近くにある、岩に囲まれてきわめて危険であった沼地」まで行って、そこ

で遭難したのだと結論した（遭難説）。

しかし「笛吹き男伝説」には、たんに「事件」の真相を解明しようとするだけでは割り切れぬ、何かがある。尋常ならざる「笛吹き男」の性格や、魔法の笛、口を開ける山といった話まで現実の出来事と結びつけることが、この伝説にたいする適切なアプローチといえるのか。

この伝説を異なるふう解釈しようとしたのは、一九世紀の神話学者たちである。その代表者としては、W・ミユラーが挙げられる。かれは、「笛吹き男伝説」に歴史的起源があることを認めつつも、アイルランドやフランスなどにも、これとよく似た話があったことを指摘している。

たとえばアイルランドのベルファストには、ハーメルンのものときわめてよく似た伝説が伝えられていて、ジェームズ・カークパトリック（二六九六一―七七〇年）の詩で紹介されている（一七五〇年）。これによれば、あるときバグパイプ吹きが音楽で人びとを踊りに駆りたて、沿岸の洞穴へ誘いこんだ。すると地面がかれらを呑みこんでしまったという。

またフランスの伝説はこうである。一二五〇年のこと、ドランシー・レ・ヌエ村がネズミの被害に悩まされていた。そこでカプチン派修道士がよばれたが、かれは「デーモン」を使ってネズミの除去に成功する。ところが村人が報酬を支払わなかったので、かれは魔法の角笛で家畜をさらっていったという（なおミュラーが挙げているほかにも、ネズミ捕り伝説や子どもの誘拐伝説は各地に存在している）。

そのうえでミュラーは、ハーメルンの話に代表される誘拐伝説には「異教的信仰の残滓」が見いだされると主張する。かれは、「笛吹き男」には異教的な小人や妖精に類似した性格が見られることを指摘している。たとえば、伝説で語られている「笛吹き男」の特異な服装は、伝承上の妖精の姿を連想させる。また、不当なあしらいを受け

れば復讐するのは妖精にも見られる性格であり、かれらが音楽でひとを誘惑することも知られている。そもそも「笛吹き男」が子どもをさらったという山は、しばしば妖精の住処として語られていた。そこでミュラーは、ハーメルンで起こった歴史的事件が、神話的な伝承と融合するなかで「笛吹き男伝説」が生まれたのではないかとしている。

「笛吹き男伝説」と「妖精伝説」の類似性にかんするミュラーの指摘は重要なものである。すでに見たように、ハーメルンの「笛吹き男」にはたしかに妖精か悪魔のような性格が認められるからである。ただミュラーは結局、聖ヨハネ祭にまつわる風習と信仰に着眼することはなかった。また、かれは中世の文化を視野に入れなかったたので、なぜ伝承において楽師と妖精のあいだにはっきりした区別がないのかという問題についても論じていない。

筆者の知るかぎり、「笛吹き男伝説」と聖ヨハネ祭にまつわる信仰との関連に気がついたのは、ファニー・ロス・テクニリユーマンだけである。かの女は「笛吹き男伝説」にかんする著書のなかで、かつて聖ヨハネ祭には超常現象が起ると信じられていたこと、とくに山が口を開けるとされていたことを指摘している。

だが残念なことに、かの女はこの問題に深く立ち入ろうとはしなかった。フロイトに感化された学者として、リユーマンはむしろ、中世このかた人びとが「笛吹き男伝説」を執拗にくりかえし、語りついできたその心理的衝動をさぐることに関心があつた。なぜ、子どもの誘拐という、本来なら嫌悪感をもよおすような話が好んで語られてきたのか。かの女の説明では、親というものはひそかに子どもを厄介払いしたい（殺したい）という欲望をいだくものである。そして「笛吹き男」に子どもが連れていかれるという話は、そうした大人の欲望を具現化したものであり、それゆえに人気があるのだという。

このようにいままでの研究では、「笛吹き男伝説」と聖ヨハネ祭にまつわる風習／信仰との関係が、じゅうぶんに論じられていない。そもそも聖ヨハネ祭においてはどのようなことがおこなわれ、またどのようなことが信じら

れていたのか、これをもつと掘りさげていく必要がある。そうしてはじめて、ハーメルンの「笛吹き男伝説」が、祝祭にまつわる不気味な世界観を背景に形成された話であることが鮮明となるのである。

三 「異界が口を開けるとき」——聖ヨハネ祭にまつわる風習と信仰

聖ヨハネ祭と異教の習俗 先述したように、「笛吹き男伝説」の内容を考えるには、六月二三―二十四日を中心にもよおされた聖ヨハネ祭に焦点をあてていく必要がある。というのも、クリスマス、ヴァルプルギス、ハロウィンなどとおなじく、この時期には異界が口を開け、その住人が出現し、ひとと接触すると信じられていたからである。

聖ヨハネ祭とは、洗礼者ヨハネの誕生を記念する祭りである。洗礼者ヨハネは、中世においてとりわけ人気であった聖人である（なお、六月二六日の「ヨハネとパウロの日」で祝祭の対象となるヨハネとはまた別人である）。『新約聖書』によれば、かれはキリストの到来を人びとに告げる役目を果たした。またヨルダン川でキリストに洗礼をほどこしたがゆえに、「洗礼者ヨハネ」の名で呼ばれる。「マタイによる福音書」（三・四）によれば、かれは荒野で暮らし、ラクダの毛皮を身にまとい腰に皮の帯をしめ、イナゴと野蜜を食した。それゆえ中世美術においては、かれはしばしば民間伝承に出てくる野人のような姿で描かれている。

しかし他の祭日とおなじく、聖ヨハネ祭もまた、前キリスト教的な祝祭がキリスト教にとり入れられるなかで生まれたものである。もともと聖ヨハネ祭は、冬至の対極をなす、夏至を祝う祭りであった（なお夏至の正確な期日は六月二一日である）。第一章五〇ページでも解説しているように、キリストの誕生日は四世紀に二月二五日と

定められた。もともとこのころは冬至にあたるため、ローマでは太陽神ミトラの誕生が祝われていた。そこでキリスト教会は、冬至祭とキリストの誕生日の融合をはかったのである。

これにつづいて教会は、夏至祭にもキリスト教の聖人をすえたが、この人物こそヨハネであった。その根拠となつたのは、ヨハネの語った「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」（ヨハネによる福音書「三・三〇」）という言葉である。これは、冬至を境に太陽の力が増すのにたいし、夏至には逆に弱くなるという自然のリズムに相当する。

しかも、「ルカによる福音書」（一一・二）において、ヨハネはキリストよりも六ヶ月早く生まれたと書かれている。これを踏まえて、一二月二五日から六ヶ月引くと六月二五日になる。さらに古くは六月二四日が夏至にあたると思われるので、この日に「ヨハネの日」^{ヨハニステーク}が制定された。

しかしながら、この時期にいとなまれた風習は、きわめて「異教的」色彩の強いものであった。そのことは、キリスト教の著述家でさえ認めている。

聖ヨハネ祭の風習は、ヨーロッパの農耕牧畜文化と深く結びついていた。その中心にあるのは、ヴェラーも関心を示した「ヨハネの火」^{ヨハニスフオイアー}である。これは、ヨハネの日あるいはその前夜（「ヨハネの夜」^{ヨハニスナハト}という）に、高台や開けた場所で点けられる大きな焚き火のことで、これを囲んで人びとは歌い、ダンスに打ち興じた。さらに男女のカップルが手に手をとってそのうえを飛び越えたり、家畜が火のなかをくぐらせられたりした（図4-14・15）。こうした風習にかんする報告は中世までさかのぼるが、なかでも有名なのはヨハネス・ベームスの文章（二五二〇年）である。

かれによると、ヨハネの夜には、ドイツ中のいたるところで火がともされ、歌い、輪舞するために老いも若きも



図 4-14、図 4-15 ヨハネの火の様子（植田重雄『ヨーロッパの祭と伝承』、Becker-Huberti, Manfred: *Lexikon der Bräuche und Feste.*）

参加した。また人びとはバイフス「ヨモギ属」やクマツヅラの花環でみずからを飾り、騎士リッター・ユボレの拍車「ヒエンソウ」と呼ばれる葉草をもち、これをおして火を見つめた。そうすると、眼を一年間病氣から守ることができると信じられていたという。現場を立ち去るときは、身につけていた葉草を「わがすべての災禍が消え、燃えてしましますように！」と唱えつつ投げ入れた。またヴェルツブルク近郊の山では、祭りの前に宮廷の人びとによって火がつけられ、そのなかに穴のあいた木の円盤がくべられた。円盤が燃えはじめると、これにしたりやすい棒を挿しこんで、メイン川へと投げる。それはまるで、炎の龍が飛びまわっているかのごとくであったという。

一九世紀になっても、これとほとんど変わらぬ風習が残存していた。そうした地域のひとつに、ドイツ南西部のオーバーシュヴァーベン地方が挙げられる。エルンスト・マイアーによれば、この地方の人びとはヨハネの日に開けた場所や十字路で火を焚き、そのうえを飛びこした。そのさい、「聖ヨハネ様、麻が三エレまで伸びますように！」と叫ぶのがならわしであったという。しかし豊饒だけでなく、さまざまな願いがこめられていたらしい。たとえば健康のため、背を高くするため、魔法にかけられるのを防ぐためといった願いとともに、火のうえを飛ぶことがあった。

ヨハネの火は、二二—三世紀あたりからヨーロッパで広く言及されるようになったが、ドイツも例外ではない。これは、火祭りがキリスト教に統合されるようになった結果、著述家たちの話題にのぼりはじめたためであろう。ドイツのヨハネの火にかんする資料は、この風習をくわしく調査したヘルベルト・フロイデンタールが引用・掲載している。そこでこれを参照しながらヨハネの火の歴史を紹介しておきたい。

フロイデンタールが挙げたなかでもっとも古い資料は、ナイセ大聖堂にある一二世紀の手写本である。そこでは、ヨハネの日にあらわれるという龍のことも言及されている（この問題はあとでふたたびとりあげる）。ヨハネの火

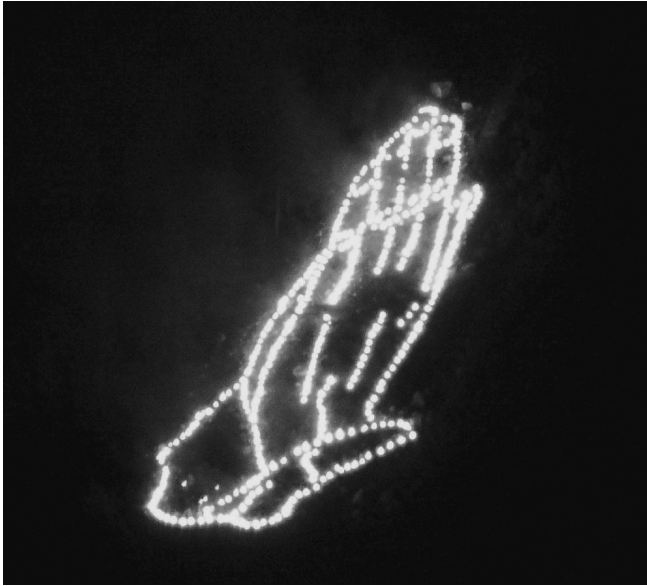


図 4-16、図 4-17 現代おこなわれるエアヴァルト（オーストリア）のヨハネの火。山岳に点火される（筆者撮影）

にたいする禁令は、一四〇八年にストラスブルで、一四二八年にミュンヘンで出されている。しかしこのころの聖職者は、夏至の火祭りにキリスト教的解釈をほどこすことで比較的寛容な態度を示していた。

王侯貴族も火祭りに熱心に参加した。たとえば一四〇一年にはミュンヘンでシュテファン公爵とその妻が、中央広場でヨハネの火を焚き、市民たちとともにダンスしたという。一四七一年には、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ三世（一四一五—一四三九年）が、レーゲンスブルクの中央広場で火祭りに参加した。このときはかれの妻や家来だけでなく、三人の司教もくわわっていた。しかも皇帝の喜びようはたいそうなもので、腕を振りかざして火のまわりを踊り、「不快なことはすべてお忘れになったかのようにであった」と伝えられる。

一四九六年には、アウクスブルクで皇帝マクシミリアン一世（一四五九—一五一九年）とフェリペ美麗王（一四七八—一五〇六年）が、ヨハネの火を点火させた。フェリペはこのとき、町一番の美女とともに火のまわりを踊ったという。一五三〇年にも皇帝カール五世（一五〇〇—一五五八年）が「トランペットや太鼓の鳴り響くなか」ヨハネの火を点けさせた。さらにかれは、焚き火のてっぺんにあった花輪をとってきた靴職人に贈り物をしている。一五七八年には、リーグニッツの公爵ハインリヒ十一世が山で火をつけ、百本の銃、トランペット、太鼓を鳴らして盛大に祝ったとのことである。

しかし、一五一七年に宗教改革がはじまってのち、ヨハネの火は「異教的」であるとして批判されるようになってゆく。ただ批判した人びとは、そのさい祭りのようを描写したので、われわれにかけがえのない情報も提供してくれている。たとえばラングフェルデンの牧師ゲルハルト・ヴァッサーマンは、ヨハネの火が出す煙が、家畜の疫病にたいする防衛手段と認識されていたことに触れている。一六九六年には、ヨハネの火からできた灰が害虫駆除のため耕作地にまかれていたことが伝えられている。また一七一一年には、ゴルツォウの牧師トリーレンベルク

が、人びとがワラでできた車輪に火をつけ、これを町の通りに転がしたあと、火勢が弱まったのを見計らってそのうえを家畜に歩かせていたことを伝えている。

一六世紀半ばから、ヨハネの火にたいする禁令があちこちで出されるようになった。たとえば一五五五年にヴァイケンドルフ、一五五九年にネルトリンゲン、一五六六年にはアウクスブルクの順で禁止・廃止が宣告されている。目立つのはブラウンシュヴァイクの例で、かの町では一五八九年、一五九五年、一六四九年と立てつづけに禁令が出され、一七三四年にはそれがブラウンシュヴァイク＝リューネブルク選帝侯国全域に及んでいる。同様にヴァイケンドルフ（一六九七年、一七四八年）、ミュンヘン（一七五一年）でも禁令がくり返されている。

禁令がくり返されたことは逆に、ヨハネの火がしぶとく残存していた事実を示している。それはこの火祭りが、生活に欠かせぬものと認識されていたからであろう。なお禁令が奏功し、火祭りが少なくとも都市部から消えたのは一九世紀に入ってからである。ところがこのころになると、ロマン主義の影響でヨハネの火がふたたび脚光を浴び、さらにヒトラー政権下では盛大にもよおされた。ナチスが、この火祭りをゲルマン的風習とみなし、イデオロギー的に利用したからである。一九八二年には、ニーダーエースターライヒ（オーストリア東部の州）の四五〇の地域でまだヨハネの火が点けられていたことが報告されている（図4-16・17はいまの火祭りを撮影したもの）。

なお、聖ヨハネ祭の火祭りがドイツ語圏だけでなく、ロシア、エストニア、ウエールズ、イタリア、ギリシア、ポーランドなどでもおこなわれていたことは、ジェームズ・フレイザーやヤーコプ・グリムが解説している。オーストリア、フランス、スカンディナヴィアなどではワラ人形を燃やす風習も見られた。またブルターニュ地方のヨハネの火祭りは、『ブルターニュのパルドン祭り』（新谷尚紀・他）で紹介されている。

聖ヨハネ祭には、このほかにもさまざまな風習があった。たとえばエーダースレーヴェンでは、長い幹の先にタ

ールの入った樽を結びつけ、その幹を鎖で固定した。そして樽に火を点けて、人びとが歓声をあげるなか、これを見るくると回転させたという。

さらに五月祭（第二章参照）によく似た風習をもつ地域もあった。たとえばテューリンゲン地方（ドイツ中部）のザクセンブルクの子どもたちは、ロープで通りを封鎖して、それを白樺と花輪で飾り、家々の前にも白樺を置くこと、一本の木を中央に立ててそのまわりを踊った。もし誰かがそこをとおり抜けようとしたら、いくら金を払うことになつていった。そうすれば、通行人は音楽を聞かせてもらい、さらに白樺を受けとつたという。

祭りの参加者が、薬草で編んだ輪を身にまとい、不浄がとり除かれるのを念じつつそれを火に投じていたのは、ベームスの報告にもあつたとおりである。ほかにも薬草の使い道はあつて、バイフス、オークの葉、シダ（ジンゲンのヒルデガルトは悪魔よけとして推奨している）、ヨハニスクラウト（オトギリソウ属）、ヒエンソウなどの輪を家に飾る風習が見られた。マンフレート・ベッカー＝フベルティの『風習・祝祭事典』によると、これはヨハネの夜に放たれる悪霊から家や農場を守るためであつた。戸にほうきを十字のかたち組んで立てかけておくのも、同様の目的であつた。またドイツ中央部では、悪天候の被害を防ぐために家のうえに輪が投げあげられた。ザクセンの村や町では、花と葉で冠が編まれ、帯や布で飾りつけたあと翌朝家々の前に吊るされた。「人びとの話では、ヨハネの冠をかけておかなかつた家には、一年幸福が訪れない」と一八四六年にエミール・ゾンマーは解説している（『ザクセンとテューリンゲンの伝説、メルヘン、風習』）。

さらにヨハネの日には、ドイツ各地で薬草が集められた。この時期には、薬草が特別に強い力をもつとされていたためである。メックレンブルク（ドイツ北東部）では薬草、とくに木の根は、正午に沈黙したまま集められねばならぬと信じられていた。

こうした風習にくわえて、シユヴァーベン地方のライマンのように、ヨハネの夜に水浴びするところがあった。これは、一三三七年、フランチェスコ・ペトラルカが伝えている行為に重なる。かれによれば、ケルンではヨハネの夜に薬草を身につけた女性たちがライン河に入って手や腕を清めたという。かの女たちは、これはとても古い風習で、こうすることによりすべての不幸を洗い流すことができると語った。

ヨハネの日に飲み食いするという習慣もあった。たとえばローテンブルクでは、かつて「ヨハネの祝福」とか「ヨハネの飲酒」と呼ばれるしきたりがあつて、ヨハネの日に隣人、知り合い、親族らとともに家の前で飲み食いしたという。ユーバーリンゲンでは過去にツンフトが集まつて似たような集会を開いていた。バイジゲンでは、教会でワインを清めてもらったあと、これを全員ジョッキで飲み干した。こうすることによつて、一年間毒や魔法から守られると信じられていたのである。

アンゲリカ・ファイルハウアーの『ドイツにおける祝祭』によれば、この日にはブレネッセル（イラクサ属）入りのケーキも食された。これは水の精がかけてくる魔法に対抗するための薬草であつた。ホルンダー（ニワトコ属）入りのケーキも食されたが、これは一年間病気を防ぐ効果があるとされた。なお新人の共同体への加入、争いの調停、雇用がおこなわれたのもヨハネの日である。

聖ヨハネ祭にあらわれる異界の住人たち　ヨハネの日やその前夜には、こうしたさまざまな風習がいとなまれているが、このころになるとあらわれて災厄をもたらす悪霊を追いはらうことも、その目的のひとつであつた。『黄金伝説』（一三世紀）のなかで、ヤコブス・デ・ウォラギネはつぎのように述べている。

この日、死んだ動物の骨をあちこちから拾いあつめてきて焼く習慣がある。ヨハネス・ベレト「一二世紀の典
「礼学者」が伝えているところによると、これにはふたつの理由があるという。ひとつには、これらは、古くか
らの習慣を守りつづけているのである。つまり、竜とよばれる怪物がいて、空を飛び、水のなかを泳ぎ、地を
はいまわる。空を飛ぶとき、欲情をもよおして、精液を深い湖や川にたらす。すると、このためにその年はた
くさんの死人が出る。そこで、これを防ぐために、動物の骨を大量に焼き、その煙で竜どもを退散させるとい
う手を考えた。そして、この行事は、聖ヨハネの祝日のころにおこなわれたので、今日でも古式を守って
いる人たちがいるというわけである。もうひとつの理由は、聖ヨハネの遺体がかつてセバステで外道の者たち
に焼かれたことをこれによって記念しようというのである。（前田敬作・他訳）

これと同様のことは、ナイセ大聖堂にある最古の資料（一二世紀）にも書かれている。

夏至のころにあらわれて害をなす存在のことは、一九世紀のドイツにおいてもなお語られていた。たとえばカー
ル・バルチュによると、メックレンブルク・フォアポメルン地方では、ヨハネの日やその前夜には「悪いクレ
プス」（ザリガニもしくはケラとしてイメージされた）が飛びまわり、毒を撒き散らすと広く信じられていたとい
う。したがってこの日には、はだしで走りまわったり、洗濯物を外に干したままにしておく危険である、もしそうす
れば癌ケクレプスになると怖れられていた。

さらに、北欧（ノルランド）でも、ヨハネの火はデーモンをはらうものとされていた。

これはその夜出て歩くというツロールその他の悪魔どもの力を封じるためである。この神秘的な季節になると、山々



図 4-18 中世の人びとはしばしば病気を飛びまわる龍としてイメージしていたらしい。この15世紀の絵はそのことを示すもので、町に荒れ狂うペストが龍の姿で表現されている。(Fuhrmann, Bernd: *Die Stadt im Mittelalter.*)

が口を開き、その深い洞穴の底からうす気味の悪い連中が現われて、しばしのあいだ踊りたわむれるからである。農民の信じているところでは、もしツロルのある者が人里近くにいるなら、そ奴は必ず姿を現わす。またある動物、たとえば牡山羊とか牝山羊とかが、燃えさかつてはちばちはぜている火の傍に姿を見せたなら、それは取りも直さずこの悪者が姿を現わしたのだと農民は固く信じこんでいるのである。(フレイザー『金枝篇』四、永橋卓介訳)

フロイデントールは、ヨハネの火が「浄火」の性格に似ていることを指摘している。浄火とは、家畜のあいだに疫病が広まるなど、共同体が災厄に見舞われたときに点けられた火である。夏至を境にはじまる盛夏には、家畜のあいだで病気の広がりやすいことが経験上知られており、これを予防するための浄火として、ヨハネの火がともされたのではないかともいわれる。聖ヨハネ祭にあらわれて毒をまく悪霊のイメージは、もともと現実体験とも結びついていたのであろう。

さらに夏至にまつわる不気味な信仰をさぐるうえで欠かせな

いのは、一九一〇世紀に収集された民間伝説である。むろんこれらが収集されたのは、ハーメルンの「子ども失踪事件」から六〇〇年もたってからのことである。また一九世紀の想像力に富む収集家たちが、勝手に伝説の内容に手を入れたり、複数の伝承を切り貼りしたという事実が問題視されて久しい。しかしこうした点を考慮に入れてもなお、これらは前近代的な世界観を知るうえで欠かせぬ資料なのである。役に立たぬと切りすてる前に、まずはその内容を見てみよう。

まずドイツ各地に伝わる伝説は、ヨハネの日のあたりになると水の精があらわれ、ひとを水中に引きこむと信じられていたことを示している。ゾンマーの伝説集にはこうある。

ヨハネの日に、エルベ川、ザーレ川、ウンストルト川、エルスター川のニクス「水の精」は生け贄を求める。それゆえに多くの船乗りは必要のないかぎり船出しようとしない。

同様のことは、プライセ川、パルテ川、イーナ川、フルダ川についても語られており、ヨハネの日には水の精が生け贄を求めるとされた。一六六九年にヨハネス・プレトリウスによって書かれたつぎの文章は、こうした信仰を反映していると考えられる。

六月にライプチヒにおいて、ライニツシエン門と跣足修道士門バインフェーサーのあいだで、水面を一匹の湖の精ゼーナスが泳いでいるのが目撃されたが、その結果七月九日にブローゼというロバ飼いの息子が、そこで水浴びして溺死した。（『怪奇なるくじ壺』）

さらに現在ポーランド領となっている西ポンメルン地方のマデュー湖では、ヨハネの日になると湖がひとを呑みこむので、船乗りは船を出してはならないといわれていた。このように、聖ヨハネ祭の時期には水は癒しの力をもつばかりではない——危険でもあるとされていたのである。こうしたヨハネの日の不吉なイメージは、ライン河流域に伝わるつぎの文言によってもたしかめられよう。

聖ヨハネは、十四人の死人を欲しがっている。七人は水の中で、七人は陸の上で。(ヘデイ・レーマン『ドイツの民俗』川端豊彦訳)

またドイツ語圏ならびにその周辺国では、ヨハネの日には水の精以外にもさまざまなデーモンがあらわれると伝えられていた。ドイツ東部のラウジッツ地方に伝わる伝説は、つぎのようなものである。

ガウファイヒとノイキルヒのあいだには、森におおわれた高台がある。そこには約七〇年前まで草地があつて、民衆によつて舞踏場と呼ばれていた。これについてはつぎのような伝説がある。ヨハネの夜になると、いつもその地中から霧が立ちのぼる。そこからつぎつぎとクヴェルクスが、男も女も、年よりも子どもも出てきて、カップルになつて歩き、さらに茂みから小さな楽師が出てきて音楽を奏でる。すると美しい新郎新婦があらわれて、みなで一緒にその場を三度歩きまわつたかと思うと、テープルについて食事をし、新郎新婦の結婚式を祝う。そのあとは大騒ぎである。クヴェルクスたちは、早朝の霧がでてくるまで夜どおし踊りあかす。それからかれらは、住まいのある丘へ戻つてゆく。偶然そこをとおりがかかった者は、いっしよに踊るよう誘われ、去

りぎわに贈り物をもらう。それは、家に幸運と祝福をもたらすことであろう。(カール・ハウプト『ラウジッツ伝説集』一八六二年)

ここでいうクヴェルクスとは、山の精のことである。^{ツヴェルク}この話では、異界の住人と人間の接触について語られているが、興味深いのは人間がそのさい贈り物をもらうということである。ここに端的にあらわされているように、ほかの祭日同様、ヨハネの日も二面性をもつていて、危険であると同時に恩恵がもたらされるのである。

このほかに、悪魔もヨハネの日にあらわれる。たとえばポルクウでは、この日になると悪魔岩のうえで悪魔が寝るといわれた。ブランデンブルク地方(ドイツ北東部)のコーポルト山では、ヨハネの日には悪魔がケーゲル(ボーリングの一種)をする、この日に岩のうえに苔がなくなるのはそのせいだといわれていた。しかしよく考えてみれば、ヨハネの日にはかたてこない悪魔などナンセンスである。『新約聖書』に「あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています」(「ペトロの手紙一」五・八)とあるように、キリスト教では悪魔はいつでもどこでも姿をあらわすことになっているからである。上記の伝説が、ヨハネの日には異界の住人があらわれるという「異教的」な発想を下地にして生まれたことはあきらかである。

ヨハネの日にはあらゆる霊的存在が解放されるので、死者の霊もまたあらわれる。ニーダーザクセン地方(ドイツ北西部、ハーメルンを含む)のザルツギター近郊にある教会では、ヨハネの夜の一二時に、処刑された罪人の霊が出てきてじぶんの首でケーゲルをしたという奇妙な伝説がある。さらにフォークトラント(ザクセン地方の南西部)の言い伝えでは、シュライツ近郊の「地中に沈んだ修道院」からヨハネの日には巡礼僧の行列があらわれ、山から山へとねり歩くという。

しかし、ヨハネの日にまつわる伝説でもっとも多く登場するのは、「白い女」もしくは「黒い女」とよばれる存在であろう。これは山や廢墟に閉じこめられた霊で、地域によりさまざまだが、生前に罪を犯したり、悲運の最期をとげたりした「哀れな魂」として説明されることが多い。地中に埋められた財宝の番をつとめていて、この義務から解放されるのを待っているとも語られる。もし誰かがその手助けに成功すれば、黄金が手に入る。

かような存在にまつわる伝説のなかで、とくに印象深いのはつぎの話であろう。これはアーダルベルト・クーンが一八四八年に掲載した、西ポンメルン地方のものである。

スヴィーネミュンデのゴルム山では、毎年ヨハネの日、そこから救済されることを待っている、大きな鍵束をもった黒い女が現れる。―あるときこの日に、貧しい女性が山へいき、乾燥したブナの実を集めたのだが、家へ帰ってみると、それは背負いかごいっぱい金の貨になっていた。

また別のときには、二人の女の子がヨハネの日、山へいったが、その日はたまたま一方の子の誕生日であった。……かの女たちがさらに歩を進めたとき、遠くから黒い女性がやってくるのを見たが、女はかの女たちに親しげに手を振り、山の穴を指し示した。最初、かの女らはそれが隣家の女性だと思ったので、近くまでいったが、すぐそれが誤りだと気がついて引き返そうとした。すると女は恐ろしい顔をして、地面からむくむくとのびあがると、その長くて黒い髪をたなびかせながら宙に舞いあがり、かの女たちを追いかけてきた。女の子らは急いでそこから逃げだして、険しい山をかけおりたが、黒い女はそれでも、ざわざわ音を立てながら追いかけてきて、かの女たちが下の草地へついたときようやく追跡をやめたのであった。（『北ドイツの伝説、メルヘン、風習』）

この話は、「笛吹き男伝説」によく似たストーリーをもっている。すなわち夏至の時期に異界の住人があらわれ、山のなかへと子どもを誘うのである。これによく似た伝説は、エストニアでも報告されている。

山のデーモンは、しばしばヨハネの日、またはその前夜に、ひとり山を歩いたり寝ていたりする者の前にあらわれる。娘あるいは女の姿、より珍しいばあいでは男の姿をし、その者を「地中の」町へと連れていく。(M・J・アイゼン『エストニアの神話』一九二五年)

ヨハネの日前後にあらわれる女の霊の話は、メックレンブルク＝フォアポンメルン地方にも見られる。たとえばブーヘン山の言い伝えによると、この山のなかには城があり、そこには呪われた王女が住んでいる。七年ごとに、かの女はヨハネの夜の二二一時のあいだ外に出てきて近くの池で水を汲むが、あるときひとりの若い羊飼いがこれに出あった。女は若者に、一時間抱きしめてほしいと頼む。そうすれば、かの女は救済されるのだという。かれはこれを試みた。だがあともう少しというときに、大蛇があらわれたので、若者は驚いて女を放してしまい、救済に失敗したという(『メックレンブルクの伝説、メルヘン、風習』一八七九年)。

聖ヨハネ祭のころにあらわれる霊的な女性の伝説は、この周辺ではほかにもルーナー山、プラウ、ホップフェン湖、ウゼドム、ツイーゲンオルト、ケーニヒスシュトゥール、ブランデンブルク地方ではフライエンヴァルデ、ニードーフィノウ、スデーテン地方ではフィッシュバッハのファルケンシュタインなどで語られており、ニードーザクセン地方も例外ではない。ハーメルンからさほど遠くないフンネスリュック城の廃墟では、ヨハネの日の夕暮れに女の子が、そこに「白い女」が座っているのを見たと言えられている。同地方ではほかにはシルデ山、アインベ

ック、レンガースハウゼンなどに、夏至のころにあらわれる「白い女」の伝説がある。

異界に人が入る話 聖ヨハネ祭のころには、この世の者たちが逆に異界へ入ることもできるとされていた。たとえばブランケンブルク（ウツカーマルク地方、ドイツ北東部）には、次のような言い伝えがある。

ブランケンブルク村のそばの、湖に面するヴァル山にはかつて城がたっていた。……あるヨハネの日、ここでひとりの貧しい日雇いが、タバコを植える仕事をしていた。真昼ごろになると、かれは妻に家に戻って昼飯をとってくるようにいい、暑い昼の太陽のもとではとても働けないから、そのあいだ少し眠るといった。……かれは横になって眠りこんだ。しばらくするとかれは目覚めたが、とても驚いたことに、すぐそばの山の入り口が大きく開いているのを見た。（クーン『北ドイツの伝説、メルヘン、風習』）

そして男がなかに入ってみると、そこには財宝の山があったという。

これと同様に、南ドイツのバイエルン地方には、ヨハネの日にだけ口を開ける地下世界の話がある。アレクザンダー・シェツプナーの掲載した伝説によると、ある母子が森へイチゴ摘みに出かけたとき、地中に穴があるのを発見する。なかに入ると「白い女」たちがいて、母親に財宝を贈った。だが母親は、有頂天のあまり肝心の子どもを穴のなかにおいて出てきてしまう。さいわい、母親が翌年のヨハネの日と同じ場所にいくと、ふたたび穴が出現し、かの女は地下にいる子どもをとり戻せたのであった（『バイエルン地方の伝説集』一八五二、五三年）。

グリム伝説集にも、「羊飼いの少年たち」という話がある。この伝説では、二人の少年が、ヨハネの日、「ハイ

リングの岩」(エーガー川流域の景勝地)の下にある扉に入った。そこには開いた長持と閉じた長持があって、開いている方には貨幣の山があった。かれらがその貨幣をとり、外へ出た瞬間、扉が勢いよく閉じたという。同様の話は、メックレンブルク・フォアポンメルン地方のテテロウでも語られている。バルチュの掲載したこの話によれば、この地の湖に浮かぶ島では、ヨハネの日の昼二—一時のあいだ、しばしば地中に穴があいているのが見られる。ただしそのなかに入った者は、一時までに出られなければ、つぎのヨハネの日まで眠り続けるという。

同様に興味深いのは、ポンメルン地方の「レッツォウのエーバンシュタイン伯爵たち」という伝説である。これは山に閉じこめられているという、一三世紀に生きた人物にまつわる話だが、そこではつぎのような話が展開されている。

何年も前、レッツォウの羊飼いがヨハネの日に、ヴォルフスブルクからさほど遠くないわゆるヒューネン山で、群れの番をしていた。するとかれはじぶんの羊ともども一気に地中へ沈んでしまい、地はその頭上で閉じられた。地下では大きな犬があらわれて、かれをひとつのドアへと導いた。これをかれが開くと、二つ目のドアがあらわれた。これも開けると、かれは大広間にいた。そこでは大勢の身分の高い男たち「山に閉じこめられている者たち」が、食卓についていた。……しかし羊飼いが、いかにすればまた山の外に出られるか尋ねると、男たち答えていわく、つぎのヨハネの日まで、つまり一年たつまでは、それは考えられないとのことであった。……一年がたったのち、伯爵たちはかれに黄金の杖を贈った。(H・D・H・テメ『ポンメルンとリューゲン島の民間伝説』一八四〇年)

ヨハネの日に羊飼いが羊もるとも地中に沈んでしまおうという描写は、子どもが生きたまま地面に呑まれたという『パッシオナーレ』やヴァイアーの文章を想起させる。ヨハネの日にひとが地下世界へ入ることができるとする話は、ほかにテューリゲン地方のヴァルト山、ザクセン＝アンハルト（ドイツ北東部）のキフホイザー山、バイエルンのオクセンコップフなどで伝えられている。また、ヨハネの日に咲く特別な花を手に入れた者だけが、地下世界に入ることができるとする伝説がザクセン＝アンハルトのファルケンシュタイン城、ザクセンのマリエン山などにある。聖ヨハネ祭にあらわれる財宝とその番人の話は、一七一―一八世紀にかけてドイツ語圏でおこなわれた財宝探索とも結びついている。じつさいにこのころの人びとは、地中に財宝が埋められていて、幽霊や悪魔がこれを守っていると信じていたのである。たとえばシュヴァーベン地方の町ヴァルトゼーのフランチェスコ会修道士、ベルナルデイン・ビーナーは、一六九二年に財宝探索に関する報告を提出している。

これによると、かれは六月二二日、午前一〇時に仲間の祓魔師たちとともに山へ宝探しに出発した。いうまでもなく、六月二二日はヨハネの日の二日前にあたる。しかも宝探しは正午に開始することが意図されていたようである。ヨハネの日にまつわる民間信仰では、魔法の力が働くのはとりわけ正午であった。

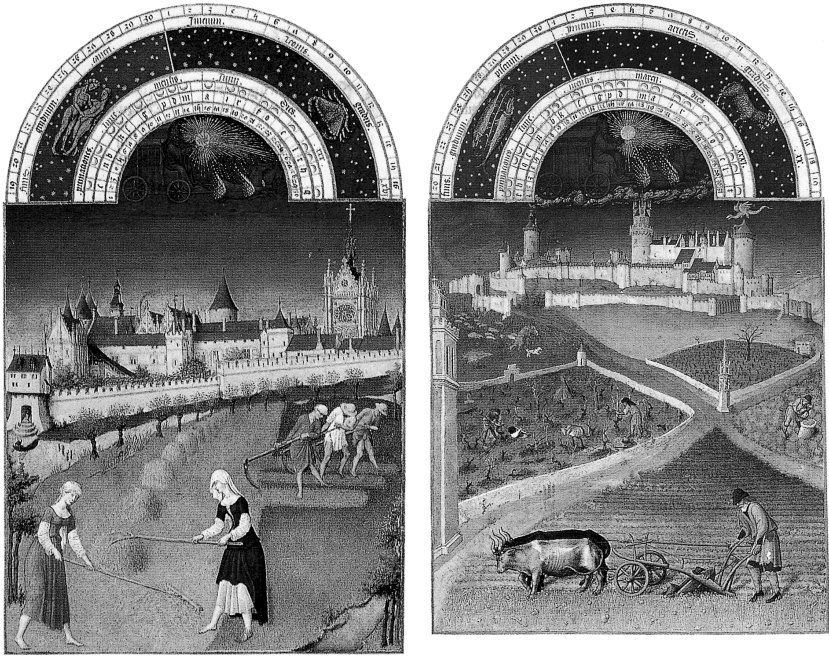
報告によれば、ビーナーは仲間とともに祈りをささげ、財宝を守る悪魔ないし霊を呼びだすべく祓魔式をおこなった。これらの霊は、宝のありかを指し示すことになっていた。だが結局、「昼であろうと夜であろうと、騒音も、ざわめきも、あるいは「霊の」出現も、一度たりとも認めませんでした」とかれは書いている（マンフレート・チヤイクナー『フォアアールベルクトリヒテンシュタインにおける宝探し』）。ここで注目されるのは、ヨハネの日が近づくると霊的存在があらわれ、同時に山が口を開けるといふ信仰が、聖職者にも受け入れられていたという事実である。

聖ヨハネ祭にまつわる信仰と中世の暮らし　ここまで、中世の『黄金伝説』をはじめ、聖ヨハネ祭にまつわるさまざまな資料を見てきた。むろん右に挙げたテクストの多くは、近代になって収集されたものである。しかし夏至に怪奇現象が起こるといって考えかたそのものが、中世―近世にまでさかのぼることは確実であろう。なぜならこの信仰は、当時の生活形態ならびにメンタリテイと切りはなせぬ関係にあったからである。

産業社会が発展するまで、ヨーロッパでは農耕牧畜を中心とした生活がいとなまれていた。それは自然のリズムと密接に結びついた暮らしである（このことは各月における労働を描いた一五世紀の『ペリー公のいと豪華な時禱書』^{とくしよ}の絵画にも見てとれる。図4-19〜22）。そのなかでは、とうぜん季節がひとつの単位として重視され、その区切りにはかならずといってよいほど祝祭がいとなまれた。

序章と第一章で解説されているように、祝祭の期間は、ひとつの秩序が解体し、一時的な混沌が発生するときである。この混沌とした空間、非日常の空間においては、マクロコスモスとミクロコスモスの境界がいつとき失われ、異界の住人が姿をあらわし、人間と接触する。ヨーロッパでは、異界の住人としては天使、聖人、悪魔、龍、精霊、幽霊などがイメージされた。こうした顔ぶれからもあきらかなように、祭りの空間は二面性をもっている。それは、再創造のためのエネルギーが充足される空間であると同時に、危険な空間でもあったのである。

しかも来るべき季節を生きようとするとき―とくに死亡率が高く、天候に左右される暮らしを送っていた時代には―常に不安がつきまとう。聖ヨハネ祭に人びとが浄火を焚いたり、薬草を集めたり、聖別されたワインを飲んだりしたのは、かれら自身が語ったように、来る一年を安全に過ごすためなのである。それはまた、この時期に解きはなされる悪霊からみずからを守る儀式でもあった。もし、聖ヨハネ祭のちに人畜が病気や死に見舞われれば、それはこのころにあらわれた悪霊のせいと人びとは考えたことであろう。



の剪毛、11月の豚の世話（樺山紘一『ヨーロッパの出現』）

そして筆者の考えでは、ヨハネの日の直後に子どもが異界へさらわれたという「笛吹き男伝説」も、そうした祭りの空間と密接にかかわっている。「夏至伝説」における《聖ヨハネ祭に異界が口を開ける↓異界の住人があらわれる↓ひとを異界へ誘う》もしくは《聖ヨハネ祭に異界が口を開ける↓ひとが異界へ入る》というパターンは、「笛吹き男伝説」の内容を強く想起させるからである。それに水の精にまつわる「夏至伝説」では、かれらは人間に声をかけることによって、いやおうなく水のなかへ引きこんでしまうとされていた。これは「笛吹き男」の奏でる音楽の魔力を想い起こさせるものである。

ハーメルンにおける「子ども失踪事件」の実態はいまなお不明のままである。し

三 「異界が口を開けるとき」—聖ヨハネ祭にまつわる風習と信仰

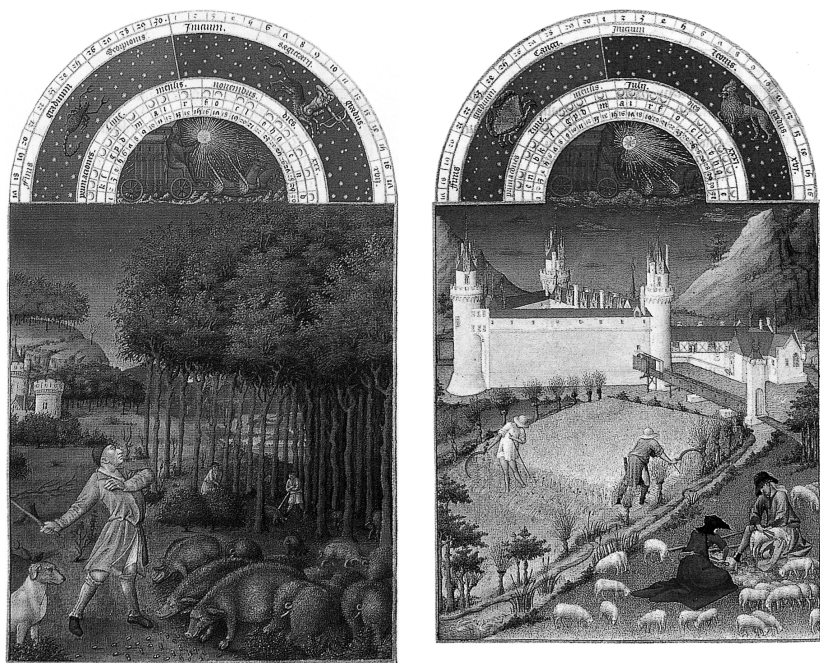


図4-19、図4-20、図4-21、図4-22 『ペリー公のいと豪華な時禱書』、1410年ごろ。
右より3月のブドウの整枝と畑の耕起、6月における牧草刈り、7月の麦刈りおよび羊

かし仮になんらかの事件が二二八四年六月二六日に起こったのだとしても、夏至にまつわる信仰はそれに一段と不気味な彩りをそえたのではないか。

しかし、ここで問題の「笛吹き男」とは何者なのか、あらためて問いなおす必要が出てくる。伝説におけるかれの外観、所持品、言動が、その特異な性格を印象づけるものであったことはすでに述べた。

ハーメルンの伝説を「夏至伝説」と比較すれば、その印象はなおのこと強まらざるをえない。夏至の時期に忽然とあらわれ、ふしぎな音色で子どもを誘う「笛吹き男」は、悪魔や妖精とほとんどかわらない存在なのである。

しかしなぜ、中世の人びとには、「笛吹き男」をそうした存在として描くことが可能であったのか。最後に、当時の複

雑な放浪楽師のイメージを確認しておく必要がある。

四 聖ヨハネ祭―笛吹き男―悪魔

中世における楽師のイメージ 初期の伝説において「ハーメルンの笛吹き男」が、異界からやって来る存在、それもネガティブな存在として描かれた理由を知るには、つぎの二点をたしかめることが重要となる。ひとつは社会的に見た中世の放浪楽師のイメージ、もうひとつは宗教的に見た放浪楽師のイメージである。

社会的に見た放浪楽師のイメージは、まだ二面性をもっていた。いっぽうでは放浪楽師たちは、日常生活に欠かせぬ存在とみなされていた。市民や村人たちにまたとない娯楽の機会を提供したからである。かつては、村および町の中央広場、通り、民家、さらには教会や墓場さえもが、音楽演奏とダンスの場として提供された。王侯貴族にとっても、楽師たちは結婚式、戴冠式、帰還などに威厳を付与するうえで欠かせぬ存在であり、かれらに豪華な贈り物をしたことが知られている。そればかりか、司教の宮廷や修道院でかれらが歓迎されることも珍しくなかった。それは、楽師たちが世俗的な楽しみを提供しただけでなく、よその地方の貴重な情報をもたらしたからである。

ところが他方、当時の放浪楽師たちには法的な権利がほとんどなく、「人間としての序列の枠外」(阿部)にあった。その理由は、かれらが農耕牧畜を前提とした定住社会に属していなかったからである。

中世の社会は、支配者層ならびに被支配者層が、特定の土地や制度に所属していることではじめて機能した。たとえば農民は、土地に束縛されることによって、はじめて保護を受けることができたのである。それゆえ放浪楽師のように、いかなる共同体にも属さぬ者は「不安をもたらす、未知なるものにとりまかれたよそ者」(ヴォルフガ

ング・ハルトウング『楽師』と人びとの目に映った。放浪楽師たちは裁判に出廷することができなかったが、それは証言の信用性が個人ではなく、所属する集団によって保証されていたからである。

つまり当時の定住社会から見て、ある町にふらりとあらわれ、また去っていく放浪楽師たちは、それこそ精霊のようにマクロコスモスに属し、人びとに恩恵をもたらすと同時に、何をしでかすかわからない存在でもあった。

宗教的に見た放浪楽師のイメージは、それよりはるかに否定的なものであった。聖職者たちのなかに、楽師の訪問を歓迎する者がいたのは事実である。しかしこれは教会の公式見解に反する行為であった。というのも教父アウグスティヌス（三五四―四三〇年）をはじめ、初期キリスト教の著述家たちは芸人や楽師を「異教」の担い手、悪魔の僕あるいは友とみなして弾劾していたからである。むしろその見解は、中世にも受けつがれていた。マルギット・バツハフィツシャーは、この時代における放浪楽師のイメージをつぎのように説明している。

中世初期では、放浪楽師に向けられていたのは、異教徒であるという非難が中心であったが、次の時期では、放浪する娯楽芸人が悪魔的な本性をもっているというイメージがだんだんと形成されてきたのであった。つねに教会は、放浪楽師を自らの権威に対する重大な脅威ととらえていた。なぜなら楽師は絶えず最大級の人気を博していたからである。しかし、放浪芸人が人間や動物に呪文や魔法をかける能力をもっているといううわさは、中世の人びとの迷信を、楽師が否定するよりも強力に助長した。それどころか、放浪芸人の存在が、超自然的なもの、説明のつかないものの存在を十分に証明するものと思われたのである。（『中世ヨーロッパ放浪芸人の文化史』、森貴史・他訳）



図4-23 楽師と踊る女。フラマンの細密画、14世紀
(Wolfgang Hartung : *Die Spielleute im Mittelalter.*)

悪魔的なダンス 悪魔的な放浪楽師のイメージは、かれらが機会を提供したダンスによってさらに強められた。中世には家庭的、宗教的な祝いのいたるところでダンスがもよおされたが(図4-23~25)、聖ヨハネ祭としてその例外ではない。

すでに解説したように、人びとはヨハネの火をとますと、その周囲を踊りまわった。皇帝マクシミリアンのような支配者階級でさえ、嬉々としてそれにくわわっていたのである。ちなみにヨーロッパ全土に広まった初期のダンス形態は、輪舞であったといわれている。ハルトウングはこう述べている。

踊り手たちは、手をしっかりとつなぎあうことでひとつの身体を形成するのだが、その外側や内側に向かう動きは、個々の踊り手にダイナミックに広がり、恍惚的な作用をもたらすことができた。このダンスのもよおしは性愛の儀式やパートナー選びに役立った。とうぜんながら、歌や楽器をともなった楽師たちは、もつとも能力に長け、またもつとも愛された随伴者であった。

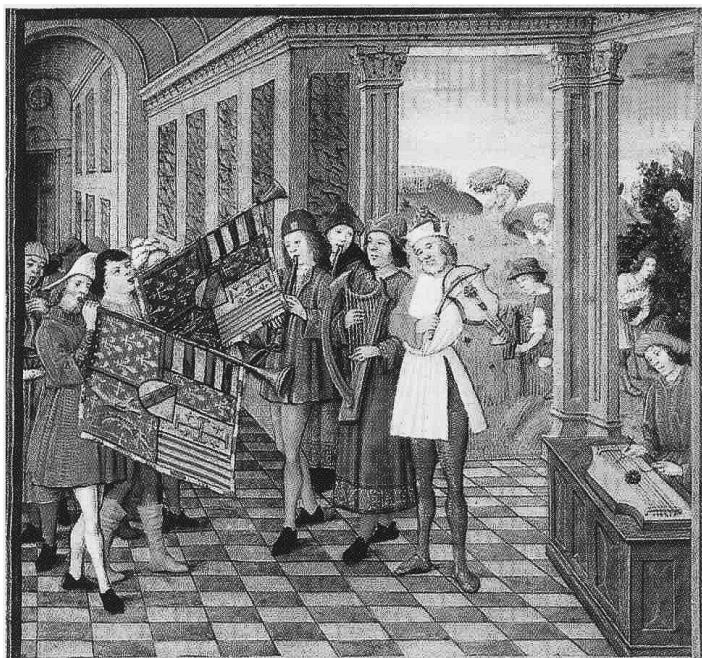


図4-24 ルネ・ダンジュール2世の宮廷における楽師たち。15世紀半ば
(Wolfgang Hartung: *Die Spielleute im Mittelalter.*)

しかし恍惚とエロティシズムをとまなうダンスは、キリスト教の著述家たちの目にそれこそ悪魔的と映った。アウグスティヌスは、「ダンスは輪のかたちになっておこなわれ、その真ん中に悪魔がいる」という、有名な言葉を残している。さらに教会や墓場においてさえ人びとが好んでダンスしたという事実を、神学者たちは苦々しく見ていた。

神学者にとって、ダンスの歴史は『旧約聖書』のエピソードまでさかのぼるものであった。「出エジプト記」によれば、ユダヤの民を率いるモーセが、シナイ山に十戒の記された石版を神から受けとりについているあいだ、人びとは司祭のアロンに頼んで金の子牛をつくり、これを神々として崇め、踊った。この背信行為に神は激怒し、一度はユダヤの民を滅ぼそうとしたという



図 4-25 ブリューゲルの『野外における結婚式の踊り』（1607年）。ブリューゲルは、エネルギーとエロティシズムあふれる庶民のダンスを活写している
(Hagen, Rose-Marie / Rainer: Pieter Bruegel D.Ä. um 1525-1569.)

(三二一・一―三二五)。

これを引用しながら、たとえばマイセンの教区監督グレゴリウス・ストリゲニティウスは聖ヨハネ祭のダンスをこう非難している（一六〇〇年ごろ）。

今日、多くの土地で人びとはヨハネの火や祝い火を焚き、樽を燃やし、火のまわりで歌ったり飛び跳ねたりしながら踊っている。まさにイスラエルの子らが、荒野で鑄造された子牛のまわりでしたように……おお、そのさいなんと多くの魔法がいとまわれていることか。多くの者が、皮はぎ場にあった死んだ馬の頭を投げ入れることで、魔女たちが来て火に触れるようしむけるかと思えば（*）、別の者はれつきとしたキリスト教徒ならしないような冒涇



図4-26 楽師とダンスする悪魔。サント＝マリー
＝マドレーヌ聖堂、1120-30年
(中村好文・他『フランス ロマネスクを巡る旅』)

行為を働くというぐあいだ。

(*)…ヴァルブルギスの夜と同様、ヨハネの夜にも魔女たちがあらわれると信じられていた。

舞踏病説の紹介で述べたように、聖ヨハネ祭のダンスには、楽師も積極的に参加していたことであろう。これにくわえて、超自然的な性質が備わっているとあれば、放浪楽師はハーメルンの伝説にますますびったりくる人物となる。

なお悪魔的なダンスとそれに参加する楽師のイメージは、中世—近世の美術にもはつきりとあらわされている。

たとえばサント＝マリー＝マドレーヌ聖堂にある一二世紀の彫刻では、悪魔と女がダンスする様子が描かれているが、そのとらには笛吹き男の姿がある(図4-26)。さらにプロッケン山の祝祭を描いた一七世紀の絵では、楽師が魔女のサバトに参加する様子が描かれた(図4-27)。

これとらんで重要なのは、中世における笛と太鼓の評価である。バ



図 4-27、4-28、4-29 魔女のサバトとそれに参加している楽師たち。1669 年
(大谷大学博物館『ファウスト 伝説と作品』)

ツハフィツシャーは、これらの楽器についてつぎのように述べている。

太鼓と笛は、ダンスの伴奏をする死に神の楽器であるとも思われていた。悪魔は笛と太鼓で音楽という武器を身につけて、墮落した魂を地獄へと追い立てる、とされていたのである。楽師たちは理由なくして「悪魔のおとり」と呼ばれていたわけではなかったのだ。また楽師たちの楽器ははめをはずしてはしゃいだり、あふれんばかりの生の喜びへと誘うことができたので、世間一般の考えでは、笛と太鼓は同時に死に神や悪魔の道具とされていた。(森貴史・他訳)

したがって、ハーメルンに突如あらわれた放浪楽師のもっていた笛は、かれが悪魔と近い関係にある、もしくはかれ自身が悪魔であることのまたとない証だったのである。

二面性を獲得する「笛吹き男」 かような文化的状況を概観すれば、「笛吹き男伝説」において楽師が聖ヨハネ祭に出でくる異界の住人と同列に扱われていることも理解できる。中世当時、放浪楽師たちは、またとない娯楽の機会と情報を提供するがゆえに歓迎されるいっぽうで、定住社会から排除されていた。村人や市民たちは、かれら特定の土地や制度に属さぬよそ者と見ていたのである。放浪楽師たちは人間秩序の外にある存在、マクロコスモスに属する存在であって、その意味では森や山に姿をあらわす幽霊や精霊とかわりない。これにくわえて、楽師と悪魔の結びつきを説く教会の伝統があった。さらにそのイメージは、ダンスや笛と結びつくことで強められ、書物のみならず教会美術や瓦版によっても表現されていた。

つまり、放浪楽師が二重のアウトサイダーであったこと、社会的にまた宗教的にアウトサイダーであったことが、これらに魔的な性格を付与したのである。つぎの南チロルの言い伝えは、悪魔と楽師（ここではバイオリン弾き）を一緒にする伝統的見解を端的にあらわしているよう。

居酒屋では悪魔は好んでバイオリン弾きの姿であらわれ、地獄のダンスを演奏する。これにより、浮かれた人びとの心はもろくなり、楽師に身売りしてしまうのだ。（ハンス・マツチャー『風習と伝説における城伯領の人びと』一九三一年）

以上の考察からもわかるように、「笛吹き男伝説」は複合的な視点から観察する必要がある。それはこの話が、その核にあるとされる事件だけでなく、夏至にまつわる風習と不気味な信仰、中世の生活形態、放浪楽師の置かれた社会的・宗教的立場とそれに由来するイメージなどを土壌として、形成されたからである。

最後になるが、「笛吹き男」と来訪神のかかわりについても少し触れておきたい。第一章で解説されているように、祭日にあられる異界の住人は、もともと恩恵をもたらすと同時に害ももたらす、二面性をもった存在として意識されることが多い。しかしキリスト教会は、聖人や天使などにその善いほうの性格を認めるいっぽうで、教義とはあいられない魔女などについては、邪悪な面を強調した。

この章でとりあげた「笛吹き男伝説」にも、この傾向が認められる。冒頭で見たように、初期の伝説では子ども誘拐事件のみが語られていた。つまり「笛吹き男」がもたらすネガティブな作用が強調されているのである。ここに、楽師を悪魔的存在とみなすキリスト教のイデオロギーが関与していることは想像に難くない。

しかし一六世紀になり、伝説にネズミ捕りのモチーフが吸収されると、「笛吹き男」はあらためて二面性を獲得することになる。すなわち、かれはまず、ハーメルンの町をネズミの害から解放する。しかしその後のハーメルン市民の不実なふるまいに対し、子どもを誘拐というかたちで罰するのである。「笛吹き男」は、恩恵と同時に災厄をももたらしうる存在となった。その結果、かれは古典的な来訪神のイメージに近づくこととなったのである。

もとはごくローカルな話にすぎなかった「笛吹き男伝説」が、今日世界中で親しまれるにいたった理由はいくつもあるう。この話がもつ不気味さ、子どもを失ったハーメルン市民の悲嘆、裏切られた「笛吹き男」の恐ろしさとも哀しき、こうしたことは誰しも感じることが可能であり、その象徴的な物語はわれわれを思索の旅へと誘う。しかし、どうふるまうかわからない異界からの来訪者と住人のあいだに展開される、緊張をともなう駆け引きが、われわれを惹きつけてやまない要素となっていることもまた、うたがいの余地のないところである。

参考文献

- アンソニー・F・アヴェニ 『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』 勝貴子訳 創元社 二〇〇六年
 阿部謹也 『ハーメルンの笛吹き男』 筑摩書房 二〇〇四年
 フィリップ・ヴァルテール 『中世の祝祭』 渡邊浩司・他訳 原書房 二〇〇七年
 植田重雄 『ヨーロッパの祭と伝承』 講談社 一九九九年
 ヤコブス・デ・ウォラギネ 『黄金伝説2』 前田敬作・他訳 平凡社 二〇〇六年
 大谷大学博物館 『ファウスト 伝説と作品』 大谷大学博物館 二〇〇五年
 樺山紘一 『ヨーロッパの出現』 講談社 一九八五年
 新谷尚紀・他 『ブルターニュのバルドン祭り』 悠書館 二〇〇八年

- 谷口幸男 『ゲルマンの民俗』 溪水社 一九八七年
- 中村好文・他 『フランス ロマネスクを巡る旅』 新潮社 二〇〇四年
- マルギット・バツハフィッシンガー 『中世ヨーロッパ放浪芸人の文化史』 森貴史・他訳 明石書店 二〇〇六年
- ジェームズ・フレイザー 『金枝篇』 (一―五) 永橋卓介訳 岩波書店 二〇〇三―四年
- 溝井裕一 「異界が口を開けるとき——「ハーメルンの笛吹き男伝説」と夏至にまつわる民間信仰について——『ドイツ文学』 第一三三卷 日本独文学会 二〇〇七年一〇月、二〇九―二八ページ
- グディ・レーマン 『ドイツの民俗』 川端豊彦訳 KMS 一九八一年
- Barack, Karl August (ed.): *Zimmerische Chronik*. Bd. 3. Freiburg i. Br. / Tübingen: 1881.
- Becker-Huberli, Manfred: *Lexikon der Bräuche und Feste*. Freiburg / Basel / Wien: 2001.
- Diederichs, Ulf / Hinze, Christa: *Sagen aus Niedersachsen*. Düsseldorf / Köln: 1977.
- Dobbertin, Hans (ed.): *Quellensammlung zur Hamelner Rutenfängersage*. Göttingen: 1970.
- Eisel, Robert: *Sagenbuch des Voigtlandes*. Gera: 1871.
- Eisen, M. J.: *Estrische Mythologie*. Leipzig: 1925.
- Erich, Samuel: *Exodus Hamelensis*. Hannover: 1661.
- Falhnauer, Angelika: *Feste feiern in Deutschland*. Zürich: 2000.
- Fincelius, Jobus: *Wunderzeichen*. Nürnberg: 1556.
- Freudenthal, Herbert: *Das Feuer im deutschen Glauben und Brauch*. Berlin / Leipzig: 1931.
- Fuhrmann, Bernd: *Die Stadt im Mittelalter*. Stuttgart: 2006.
- Grimm, Jakob: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden: 2007.
- Hagen, Rose-Marie / Rainer: *Pieter Bruegel D.Ä. um 1525-1569*. Köln: 2007
- Hartung, Wolfgang: *Die Spielleute im Mittelalter*. Düsseldorf / Zürich: 2003.
- Hartung, Wolfgang: *Die Spielleute*. Wiesbaden: 1982.

- Haupt, Karl: *Sagenbuch der Lausitz*. Leipzig: 1862.
- Humburg, Norbert (ed.): *Geschichten und Geschichte: Erzählforschertagung in Hameln, Oktober 1984*. Hildesheim: 1985.
- Humburg, Norbert (ed.): *Der Rattenfänger von Hameln: die berühmte Sagenstadt in Geschichte und Literatur, Malerei und Musik, auf der Bühne und im Film*. Hameln: 1990.
- Krogmann, Willy: *Der Rattenfänger von Hameln : eine Untersuchung über das Werden der Sage*. Nendeln / Lichtenstein: 1967.
- Lütolf, Alois: *Sagen, Bräuche und Legenden aus den fünf Orten Luzern, Uri, Schwyz, Unterwalden und Zug*. Hildesheim / New York: 1976.
- Mascher, Hans: *Der Burgerritter in Glaube und Sage*. Bolzano: 1931.
- Meier, Ernst: *Deutsche Sagen, Sitten und Gebräuche aus Schwaben*. Stuttgart: 1852.
- Müller, W. : Die Sage von dem unglücklichen Auszuge der hämelschen Kinder. In: *Vaterländisches Archiv des Historischen Vereins für Niedersachsen*. Hannover: 1843, pp.83-94.
- Prætorius, Johannes: *Der Abenteuerliche Glückstopf*. 1669.
- Rostek-Lühmann, Fanny: *Der Kinderfänger von Hameln: Untersage Wünsche und die Funktion des Fremden*. Berlin: 1995.
- Spanuth, Heinrich: *Der Rattenfänger von Hameln*. Hameln: 1985.
- Tschalkner, Manfred: *Schatzgräberei in Vorarlberg und Lichtenstein*. Bludenz: Geschichtsverein Region Bludenz (Bludenzzer Geschichtsblätter Heft 82+83), 2006.
- Ueffing, Werner: Die hamelner Rattenfängersage und ihr historischer Hintergrund. In: Norbert Humburg 1985, pp.185-191.
- Uther, Hans-Jörg (ed.): *Deutsche Märchen und Sagen*. Zweite, verbesserte Auflage (CD-ROM). Berlin: 2004. <http://www.digital-sagen.de>
- Bartsch, Karl: *Sagen, Märchen und Gebräuche aus Mecklenburg 1-2*. Wien: 1879/80.
- Bechstein, Ludwig: *Deutsches Sagenbuch*. Meersburg/Leipzig: 1930.

- Büsching, Johann Gustav: *Volks-Sagen, Märchen und Legendcn*. Leipzig: 1812.
- Gottschalk, Friedrich: *Die Sagen und Volksmärchen der Deutschen 1*. Halle: 1814.
- Gräße, Johann Georg Theodor: *Der Sagenschatz des Königreichs Sachsen*. 2. Aufl. Dresden: 1874.
- Grässe, Johann Georg Theodor: *Sagenbuch des Preussischen Staates 1-2*. Glogau: 1868/71.
- Grimm, Jacob und Wilhelm: *Deutsche Sagen 1-2*. Berlin: Nicolai 1816/18. In: Uther (Deutsche Märchen und Sagen) 2004.
- Kuhn, Adalbert: *Markische Sagen und Märchen nebst einem Anhang von Gebräuchen und Aberglauben*. Berlin: 1843.
- Sagen, Gebräuche und Märchen aus Westfalen und einigen andern, besonders den angrenzenden Gegenden Norddeutschlands 1-2*. Leipzig: 1859.
- Kuhn, Adalbert/Schwartz, W.: *Norddeutsche Sagen, Märchen und Gebräuche aus Mecklenburg, Pommern, der Mark, Sachsen, Thüringen, Braunschweig, Hannover, Oldenburg und Westfalen*. Leipzig: 1848.
- Pröhl, Heinrich: *Unterharzische Sagen*. Aschersleben: 1856. *Harzsagen, zum Teil in der Mundart der Gebirgsbewohner*. 2. Aufl., Leipzig: 1886.
- Schambach, Georg/Müller, Wilhelm: *Niedersächsische Sagen und Märchen*. Göttingen: 1855.
- Schöppner, Alexander: *Sagenbuch der Bayer. Lande 1-3*. München: 1852/52/53.
- Sommer, Emil: *Sagen, Märchen und Gebräuche aus Sachsen und Thüringen 1*. Halle: 1846.
- Temme, [Iodocus] [Leodatus] H[ilbertus]: *Die Volkssagen von Pommern und Rügen*. Berlin: 1840.
- Wann, Wolfgang: *Der Rattenfänger von Hameln: Hamelner Landestinder zogen aus nach Mähren; für den Druck bearbeitet von Walter Scherzer*. München: 1984.
- Weier, Johann: *De Prestigijs Daemomn*. Frankfurt a. M.: 1586.
- Woller, Waltraud: *Zur Entstehung und Entwicklung der Sage vom Rattenfänger von Hameln*. Zeitschrift für Deutsche Philologie. 80. Bd. Berlin: 1961.
- Wolf, Helga Maria: *Das Brauchbuch*. Freiburg/Basel/Wien: 1992.